

結

疑いあいの末、あなたは処刑台に吊るしあげられました。

「ずっと自分が何者か知りたいと願っていました」

呟いた言葉を、村人たちが聞いています。
殺さなければと怯えながらも、あなたの言葉を
完全に切り捨てることはできないようでした。

「今なら、自分がただ『人間』だったと胸を張れる気がします」
あなたは優しげに微笑みました。

「目の前に自分の死があることがこんなに怖くて。
だから、ただこの身が人間であるだけでよかったと知れた」

「……そして、何より」

あなたはずっと、後悔していました。

自らの発言が、疑いあいの席が設けられるきっかけになったと。
そのせいで、お互いを傷つけあう場が生まれてしまったと。

「どうしても、自らが人を殺さずに済んだことに安堵してしまうから」

この投票で人を死なせずに済んだことを、心から喜べる自分は
真実『人』であるのだと、あなたは知ることができたのでした。

+++++

END-M-3：『殉じた正義』